

博物館新館30周年記念シンポジウム

～釧路市立博物館の歩みとこれから～

釧路市立博物館は、昭和11年7月14日に創設された「釧路市立郷土博物館」が博物館活動の礎となっています。この間、多くの先達の調査研究により、自然・人文両分野にわたる収蔵資料の充実が図られてきました。昭和40年代には、新館建設の機運が盛り上がり、大量の資料の寄贈など多くの皆様のご協力のもと、昭和58年11月3日に、ここ春湖台の高台に待望の新館が完成し、名称も「釧路市立博物館」と改称されてから、早いもので、今年が30周年となります。

この度、新館30周年を記念して、博物館に関わってこられた方々を講師にお招きし、「新館開館30周年記念シンポジウム～釧路市立博物館の歩みとこれから～」を11月9日に開催いたしました。ここでは、パネリストの方々の講演要旨を記載させていただきます。



●新館開館30周年記念シンポジウム

日 時：平成25年11月9日（土）

午後1時30分～3時

会 場：釧路市立博物館講堂

共 催：釧路市立博物館・釧路市立博物館友の会

パネリスト：西 幸隆 釧路市立博物館 元館長

佐藤宥紹 釧路短期大学 教授

境 智洋 北海道教育大学 准教授

山代淳一 釧路市立博物館 学芸主幹

コーディネーター：新庄久志 釧路国際ウェット

ランドセンター技術委員会技

術委員長

地域で活動する博物館

～釧路市立博物館の歩みと今後への期待～

西 幸隆

私が博物館に関わりを持ったのは昭和38年、高校生の時であります。その頃博物館では緑ヶ岡遺跡の発掘調査をやっておりまして、それに参加させていただいたのが始めです。その後昭和43年に大学を卒業しまして、昭和43・44年の二年間は博物館の臨時職員として、4階に展示してある佐藤直太郎先生の資料の整理をやっていました。その後正式に勤務するようになったのは昭和45年からのことで、博物館には37年間勤務いたしました。本日は博物館がどのような過程で今日に至ってきたのか、という話をさせていただきたいと思います。

釧路市立郷土博物館は、昭和27年に博物館新聞を毎月発行し、全国に配布いたしました。その後昭和35年には博物館々報と名を変えて、隔月で発行することになりましたが、これらは全国に名を知らしめる、博物館の顔になりました。その当時それだけ頻繁に印刷物を発行する博物館は、非常に珍しかったのです。

新館を意識し始めたのは、昭和41年になってからです。博物館に関係する様々な団体から、市長宛てに要望書が出されるようになりました。この頃には展示等小委員会が設立されて、外部の識者の方々にも加わっていただきました。これが博物館を建てることになった、第一段階です。

第二段階は、昭和46年に博物館友の会が設立され、外郭団体として北海道自然保護協会釧路支部が設立された頃のことです。その当時博物館紀要が発行されることになり、また学芸員を増員したこともあり、総合調査を始めようという気運も高まってまいりました。その様な中、昭和51年になると、埋蔵文化財調査センターを建てるという話が、持ち上がってきました。これが第三段階です。

その時には博物館の4分の1を埋蔵文化財調査セ



ンターにしようという話で纏まりました。最初に埋文センターを建て、それに継ぎ足さないと博物館が出来ないという作戦に切り替えたのです。それが功を奏し、昭和58年11月3日に釧路市立博物館がオープンしました。

新館が出来てからは多数の社会教育活動を実施してきたわけですが、国の方針が出た平成4年から生涯学習へとかわっていきました。その後博物館では、この先何をしていくのかという、非常に大きな課題を抱えるようになりました。

博物館の展示はバブル時代に3億5千万円をかけましたが、今これを壊して5億円で新しい展示に変えるというのは、極めて難しいことであると思います。こういうことは計画を練って次の世代に引き継いでいかなくてはならないことだと思っています。その転機はいつかと言いますと、私は3年後の博物館創立80周年の時であると考えています。これが一つの契機になるのではないのでしょうか。

この時には、いま10名の学芸員が新たに揃ったわけですから、是非とも一丸となって再び「総合調査」に取り組まれますよう期待をしております。

また、補足になりますが、博物館友の会が独自の活動を行い自立されてきている現状を見ると、発足当時を知る一人として感無量のものがあります。

生涯学習と博物館

佐藤宥紹

私は昭和52年12月の人事異動で釧路市埋蔵文化財調査センターに発令され、昭和63年3月まで、お世話になりました。初代の片岡新助館長さんを一世、

次の澤四郎館長さんを二世とすると、私は釧路市博の第三世代の最後、または第四世代の起点に位置するのか？ そう、考えております。

釧路市立博物館に「立館の趣旨」というものがあったようにおもいます。片岡館長さんは阿寒国立公園の啓発と教育。澤館長さんは国指定史跡の拡充と釧路湿原の国立公園化ということ。それぞれを、釧路市博の「時代のテーマ」に掲げていたと、私は受け止めてきました。

さて澤館長さんは、「社会教育機関の主催する講座。公民館・図書館は学部、博物館のそれは大学院の講義にあたる」と、職員にハッパをかけていました。私は「講座の企画と設営という名のヒト集め要員」。いつも鍛えられていました。

「博物館と生涯学習」という題で、澤館長さんの申された「博物館の生涯学習講座は大学院の講義」の意味を、私なりに敷衍させてもらうことにいたします。三点あります。第一は、「グローバル化時代に地域学習を組み立てる意義」ということです。第二に「情報多様化のなかで、社会教育機関からの情報をもつ意味」に、ついてです。第三は「学校教育体系が主流の時、生涯学習体系のもつ機能」に関して、です。

ヒト・モノ・情報が地球規模で動く。そうしたときに、地域博物館が提示する生涯学習情報に、どんな意味があるか。そこを、「グローバル化時代に地域学習を組み立てる意義」と、考えておきたいとおもいます。本学では、地域の環境と文化に、二つの視点を掲げています。その一は、「釧路の環境＝自然は『日本の自然史博物館』」、その二は「釧路の文化＝開発は『近代日本の縮図』」と表現するのです。そこから北海道東部は、「各種学術情報が豊富にして、かつ日本の自然と開発を凝縮している」と、考えてきました。

博物館での生涯学習の第一は、地域の潜在情報を顕在化、可視化＝目に見え、利用できるようにしてもらう役割があります。そもそも科学技術や学術は、どこの入り口からアプローチしても、それは観点の違いであって、たどりつく「真理はひとつ」と伝えられています。

博物館の生涯学習。そこにはたとえば、釧路の自然なら国際的スタンダードで、釧路の文化でも日本のスタンダードの基準で、実は国内外の研究者の期待にも応える学術情報を提供してきた実績があると、考えてきました。これからも重視を。

次は博物館がもつ生涯学習の機能について、深い期待をこめ、市民代表の一人として申させてもらいます。第二は、「情報多様化のなかで、社会教育機関から発信される情報をもつ意味」に、ついてです。「情報多様化」。多様化がよいのか、多文化がよいのか、実は難しい点です。しかし、市民は「自己責任を求められる時代」に、「自己判断」の手がかりを「どこに求める?」。バスの車体に不動産の広告で、「相談できる人いますか」と、あります。

出版にしても報道にしても、情報が活字で伝えられることが主流であった時代。そこには多くの人が、チェックにもスクリーニング=透過にも関わっていました。情報を創造する過程でも、情報を提供するプロセスでも、専門職がかかわって検証と広い視野、深い問題意識で、信頼性と信憑性の確保に努めてきました。

現在、学生の読書、新聞を読む時間は、かぎりなく少ないのです。ネットと携帯電話に要する時間は増加しています。ネット情報。検証も信頼性も、市民はよほど利用のスキルと思想を熟成させぬと、不利益を受けることが懸念されます。

「博物館と生涯学習」。その第三に、「学校教育体系が主流の時、生涯学習体系のもつ機能」ということを、申し上げておきます。経済学者で、暉峻淑子=てるおかいつこさんという人がいます。戦前、義務教育をうけていた暉峻さんは、図書館に通います。そこで読んだ本のなかから、「学校で先生が言わないこと、教えないことが『世の中にある』のだ」ということを、発見するのです。そして、どうして「先生はいわないのか」ということに思いめぐらし、「自分も言わなかった」のだ、そうです。

学校教育体系では「これまでにわかっていること」「将来、必要とおもわれること」が伝えられます。しかし、実際に世の中を生きていくためには、「今の時代を生き抜くために必要な学習」が、実はある

のだとおもいます。

博物館が伝える環境や文化に関する学術情報。そこに即効薬を期待できるものもあります。それだけではなく、暉峻さんが提示している論点は、「人類が間違いを起こさぬためには、幅広い生涯学習体系の情報提供と市民受容=市民がうけいれる基盤こそ、最重要」。私は暉峻さんの提示している論点を大事にしたいのです。

博物館勤務時代と記憶しています。都内の山手線で移動中、女性客が申ししていました。「今日の話、よかったわねー。あそこの学芸員に力があるから、優れた講師を招へいできる」と。どちらの博物館も、学芸員は健闘しています。

講座は資金を用意し、立派な講師を招くだけでは成立しません。聴いてくださる市民のみなさんがくあってこそ。新館30周年、かわらぬ支持を要請します。

博物館との連携

境 智洋

科学の話題で満ちた釧路の街にしたい。学校でも家庭でも、企業でも会話の中に科学の話題であふれるようにしたい。私の大きな夢です。そのためには、釧路の博物館、科学館、大学はもとより、企業、公共機関など、様々な機関が連携し、科学的な話題を市民に提供していくことが必要です。1つ1つの機関が独自にそれぞれの機関の得意分野を提供するのではなく、たとえば、釧路サイエンス週間を設けて、それぞれの機関がイベントを実施したり、情報提供する。報道機関を利用して、科学の情報を連載してそれぞれの機関が提供する。など、関係機関が連携し、それぞれの活動や情報提供を市民に認知させていくことが重要と考えます。

また、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校、専門学校…それぞれの学校種の教員が積極的に博物館、科学館などの科学教育機関を活用する事です。教員が博物館などの科学教育機関の使い方を理解すると、子どもにその利用法を伝えるとともに、学習で使おうとすることでしょう。そのため



には、まずは、教員が科学教育機関に足を運ぶ、そして活用してみる事です。

その1つの試みがジオフェスティバルの実施、そしてジオウィークの設定でした。博物館、科学館、大学、高等学校、気象台、企業そして小中学校と、ジオをキーワードに1つになったイベントです。釧路周辺には、地球科学分野の素材が多くあります。それらの情報を学ぶ環境を多くの市民に提供していくことが、ジオウィーク、ジオフェスティバルの役目と考えました。そして、教員が科学館へ足を運ぶこときっかけを作る役目と考えました。2年目には参加人数が倍になり、1000名の参加者が見えてきました。参加団体も増えています。今後もこれが多くの市民に認知され、教員にも認知されていけば、ジオから迫る『サイエンスCity 釧路』に近づくことと思います。また、科学屋台村のように、広くサイエンスを提供するとともに、釧路市を挙げてサイエンスを取り上げる環境を整えば、『サイエンスCity釧路』になることでしょう。

科学館で教員研修を行う『DoToねっと』も5年目を迎えました。科学館で定期的に研修を行うこと、小中高等学校の枠を超えて実施していること、JAXAと連携していること、教員同士が講師となっていること、教員養成系大学生も一緒に受講していること、博物館からも講師として迎えていることなど、全国的にも注目されている教員研修です。5年間で述べ800名近くの教員が研修を受けています。釧路で小さな小さなサイエンスCityへの芽が出ています。

『サイエンスCity釧路』は今では夢です。しかし、多くの科学関係機関が連携し、市民に科学の情報を効果的に伝えることを続けると、きっと夢は叶う

と信じます。

博物館の事業

山代淳一

博物館で開催する市民を対象とした教育普及活動は、開館当初の昭和11年から、釧路考古学研究会と共催で「考古学講演会」等が開催されていました。特に昭和20年代後半から30年代に入ってから、本格的に教育普及活動が行われるようになりました。また恒常的に特別展が行われるようになったのもこの頃で、昭和41年から48年までは、多くの市民に見学していただけるよう、市内デパートの丸三鶴屋や公民館を会場に実施しています。

講演会、講座をはじめ観察会の諸行事などは、探鳥会や遺跡探訪会のように、現在も受け継がれているものもあります。そして昭和58年の新館開館からは、学芸員が充実したこともあり、数多くの事業が実施されるようになりました。

現在は博物館のある春採公園で行う観察会も多く、春採湖畔草花ウォッチング・春採湖畔探鳥会・調べてみよう春採湖の昆虫などを開催しています。また、釧路・足寄合同化石観察会のように、他館と共同で実施する事業も行っています。その他数多くの講演会や体験講座を開催し、博物館1階マンモスホールや2階特別展示室では年に7～8回、企画展や特別展を開催しています。

これらの事業は博物館と埋文センター合わせて10人の学芸員で実施しています。また博物館には博物館友の会の会員が約120名いて、事業をサポートしてくださったり、博物館まつりやおそなえもちをつくらう等、友の会々員が主催して行っている事業もあります。

私からは市民対象の教育普及活動を中心とした話をさせてもらいました。これからも事業の参加者や皆さんの声を聞いて、さらに市民のニーズにあった事業を企画して、多くの方々に足を運んでいただける博物館にしたいと考えております。

(文責:山代淳一)